

中国語における受身表現の典型性について

—プロトタイプ論によるアプローチ—¹

路 浩宇

(日本・名古屋大学)

本文从概観角度着眼汉语被动范畴，援用原型理论确立了该范畴的原型模式，以谓语动词的及物性为例归纳出了被动式由典型到非典型的连续统，并对被动范畴呈现出的语义扩张性及连续性进行了概括，最后指出语法化在非典型用法派生过程中所起到的根本作用，语法化进程的单一性是致使被动范畴呈现语义、结构多样性的根本动因。

本稿では、プロトタイプ理論を援用して、本研究で取り上げた諸事例に見られる意味拡張を総括し、非典型的な受身の諸成員の間に見られる連続性の体系化を試みた。従来の受身表現の研究においても文法化との関連については指摘されてきたものの、非典型的な受身表現においては、この文法化が統語構造により強い影響を与えることになるものと考えられる。受身表現のバリエーションの増加に従って、“被”などの受身のマーカーについても、前置詞や助詞が果たす文法的機能と同様に、より抽象化・機能化の度合いが進んでいくものと筆者は予想している。

1. はじめに

受身表現を構成する主語、述語等の文成分の有する特徴に関して、先行研究では様々な言及が見られる。本稿はプロトタイプ理論を援用して、従来指摘されてきた普遍的な特徴から逸脱した現象の意味役割、語用的機能を総括するものである。先行研究の指摘を参照しつつ、中国語における受身表現のプロトタイプを確立し、諸々の非典型例における共通点を見出した上で、受身という範疇における典型的モデルから周辺的モデルへの連続体 (continuum) を帰納的に導出する。

2. プロトタイプ理論について

概略的に言えば、プロトタイプ理論とは「ある範疇に属するとされる成員は決してすべてが対等であるのではなく、極めてふさわしくその範疇の成員と判断されるものから、その範疇への所属が疑わしく思われるようなものまで段階的な差があり、従って範疇と範疇の間の境界も決して明確であるとは限らず、周辺部では隣接する範疇との重なりを示す場合も起こりうる」というカテゴリー化に関する理論であり、あるカテゴリーに属する成員の中で、もっともふさわしいと判断される成員が「プロトタイプ」(prototype) と呼ばれている (G・レイコフ 1993:752)。

このプロトタイプは一般的に次のような特徴を持つ。

- ① 瞬時に思い出すことができる。
- ② 長期的かつ安定的に記憶されている。
- ③ 多くの人が画一的に設定できる。

1 本稿は、名古屋大学国際言語文化研究科提出の博士論文『現代中国語における受身表現に関する研究—非典型的な事例を中心に—』(2017年)の一部に、加筆修正したものである。

④幼少時から身近に親しんでいる。

(辻 2002:224)

カテゴリーはプロトタイプを中心に内部構造を持ち、プロトタイプを核とする同心円を描くことができる。その周辺部に行くに従って「そのものらしさ」が薄れる。例えば、鳥のカテゴリーでは、スズメやカラスに比べるとダチョウやペンギンなどは鳥らしくない周辺の成員となる。

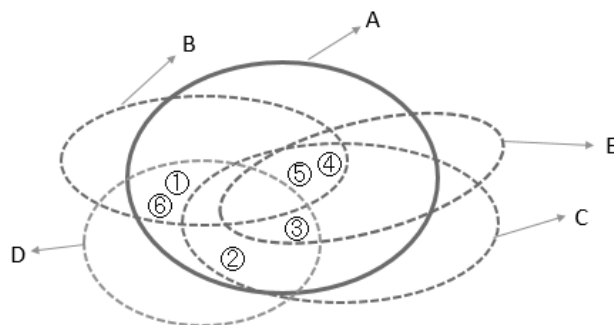
3.中国語における受身表現のプロトタイプ

言語は生きているものである。言語自身の変化と更新によって、従来のいわゆる文法に合致しないものや非文となっていたはずのものが認められるようになったため、中国語の受身範疇は以前より広がり、複雑な様相を呈している。例えば、不定名詞句が主語（受け手）になる、他動性の低い動詞が述語（動作行為）になる、第一人称が仕手になるといった一般的な受身表現と異なる表現が見られる。これらの表現は特有の情報伝達の機能や語用的な意図を示す、バリエーションに富んだものである。本稿では、こうした特殊性が表されている表現も含めて、中国語という文法範疇における受身の特性をまとめ、その範疇に属する成員の間の関連性を見出すことを試みる。

角田（1985）によると、ある構文を認定するための意味的特徴と統語的特徴をまとめようとする場合、世界の言語すべてに該当する必要十分な定義をすることは非常に困難であるため、様々な言語の文法書で該当構文と呼ばれている文の諸特徴を備えた文をその言語類型におけるプロトタイプと認定するという方法を取らざるを得ない。以下、この立場を踏襲しつつ、中国語における受身表現のプロトタイプを帰納的に導いてみる。先行研究においては、受身表現を認定するための文法的特徴として次の諸項目が挙げられている。

- ①受け手を表す名詞は一般に定的なものである（黄伯荣・廖序东 2003）。
- ②動作行為を表す動詞は一般的に他動詞である（马真 1997）。
- ③受身のマーカー“被”によって仕手を導く（张志公 1953、李珊 1994、石毓智 2015）。
- ④望ましくない出来事を表す（马真 1997、刘月华等 2001）。
- ⑤受け手に対する強い影響性を有する（张伯江 2001）。
- ⑥述語には裸形式の動詞だけでなく、結果義を表す補語等の付属成分も必要である（张伯江 2001）。

以上に挙げた諸項目は受身表現のプロトタイプを確立する重要な要素だと言えるが、プロトタイプと認定するための十分な条件ではなく、あくまでこれらの特徴をより多く持ったものは受身表現の性質がより高いという程度問題である。次の【図1】を用いて具体的に説明する。



【図1】プロトタイプ及びその周辺的な表現が含まれている受身表現のシステム

- (1) 那个红色的杯子被他摔坏了。2—①②③④⑤⑥が含まれる A モデル

[その赤いコップは彼に壊されてしまった。]

- (2) 我让妹妹哭得没了主意。—①④⑤⑥要素が含まれる B モデル

[私は妹に泣かれてどうすればいいのかわからなくなりました。]

- (3) 有人在同安区东溪五显镇段的河道中私自采沙，导致河床下陷，一座水闸被毁，并危及防护堤及周边农田。

(厦门日报 2003-3-24) —②③④⑤の要素が含まれる C モデル

[誰かが同安区東溪五顯鎮区間の川の中の砂をひそかに採取したことによって、川床の陥没を引き起こし、水門が壊されてしまって、危害が防波堤とそのまわりの農地にまで及んでいる。]

- (4) 那种珍贵的药材竟然被我找到了。—①②③⑥が含まれる D モデル

[その珍しい薬草はなんと私に見つけられた。]

- (5) 天天被加班，我该辞职吗? (百度知道) —③④⑤の要素が含まれる E モデル

[毎日 (上司に) 残業させられるなんて、私は辞職すべきですか。]

【図 1】は受身の範疇にもっとも模範的なモデルとそうでないモデルを示している。①～⑥は上述に挙げた受身表現のプロトタイプを認定する条件であり、例 (1) ～ (5) が対応する A、B、C、D、E の五つのモデルはそれぞれ異なる統語的特徴を備える受身表現である。例 (1) ～ (5) はいずれも受身表現であるものの、それぞれの意味と伝達されている情報量や発話者の意図が異なっている。実線で表示した A モデル (例 (1)) は①～⑥のすべての条件を有し、普遍性をもっとも具えたプロトタイプ的な受身表現であると言える。点線で表示した B モデル (例 (2)) は“哭”という他動性の低い述語と使役義を表す受身のマーカー“让”が用いられ、②と③の条件が欠けているため、受身の典型性が A モデルより下がるものである。B モデルと同様、C (例 (3)) と D (例 (4)) のモデルもそれぞれ四つの条件を有しているが、A モデルほど典型的ではない。また、E モデル (例 (5)) は三つの指定条件しか有さず、A モデルからもっとも逸脱している。その一方、A、B、C、D、E の間に一定的な関連性が存在している。例えば、B モデルは④と⑤という条件で C モデルと共通しているが、①と⑥の条件を持って、C モデルと異なっている。また、C モデルは D モデルと同様に②、③の条件を満たしているが、①、⑥の条件を持たない点で D モデルと異なっている。

言語は動的なものであり、その通時的な変化によって、コーパスや日常会話の中に例 (1) 以外のような受身表現の普遍的な特徴があまり見られない例が次々と生み出されることになる。これらの非典型的な表現は当初不自然だとされても、時間と共に受け入れられていく表現であり、プロトタイプとの間に家族的類似性 (family resemblance) を持ち、密接に関連しているものであると言える。次節では、受身表現の述語動詞を取り上げて、他動性の度合いに基づいて典型から非典型への連続体に表れる規則性を考察する。

4. 受身表現に用いられる述語動詞の連続体

馬真 (1997) や徐丹 (2004) 等では、自動詞を含めて授受関係を明確に示すことのない動詞は、プロトタイプの受身表現の述語動詞にはなれないと指摘されている。言い換えれば、動作行為の授受関係を明白に示すことのできる他動詞が受身表現の典型的な述語となる。例えば、

2 本稿では、出典が明記していない例文は作例である。特に説明が付いていない限り、その邦訳は引用者によるものである。

(6) 闻一多先生一九四六年被国民党反动派杀害。

[聞一多氏は 1946 年に国民党反動派に殺害された。]

例(6)は他動詞“杀害”が述語となった受身文である。動補構造“杀害”は「危害を加えて人を死に至らせる」の意味を表し、仕手が動作対象に一定の影響を与え、ある一定の結果を導くという他動的関係を築くことができるものである。このため例(6)では、“杀害”という動詞によって結ばれている受け手(“闻一多先生”)と仕手(“国民党反动派”)の受動関係が明確に表される。しかしながら、他動詞以外の品詞が述語になる受身表現が見られる場合がある。

(7) 母亲被他吓了一跳。【心理動詞】

[母親は彼に驚かされた。]

(8) 在朝鲜的每一天，我都被一些事情感动着。【心理動詞】

[朝鮮での毎日、私はいつも何がしかのことに感動させられていた。]

(9) 他被邻居的孩子哭了一夜。【自動詞】

[彼は隣の子に一晚中泣かれた。]

(10) 夜里很晚的时候，被客人这么一来，害得我没休息好。【自動詞】

[夜遅く、お客さんにこうして来られて、ちゃんと休めなかった。]

(11) 双 11 大学生“被实习”分拣快递，工作 10 小时拿 10 元。3(腾讯新闻 2016-11-19)【自動詞】

[11 月 11 日、大学生は「実習をさせられ」、物流会社で荷物を分類する作業を行い、10 時間毎に 10 元をもらえる。]

(12) “被精神病”：河南网友因帮助残疾人状告政府被当成精神病送进医院接受治疗。(百度百科)【名詞】

[「精神病と言われる」：河南のネットユーザーが障がい者に政府を提訴することを幫助したとして、精神病患者として治療を受けるという理由で入院させられた。]

(13) 教育部称 67% 公众赞成汉字调整，网友调侃“被 67%”。4(腾讯新闻 2009-8-29)

【数量表現】

[教育部は大衆の 67% が漢字の調整に賛成と称するが、ネットユーザーは「67% だと言われた」とからかう。]

³ 中国では、「独身の日」と言われる 2016 年 11 月 11 日に、独身のプレゼントを購入するという理由で、インターネットユーザーたちがネットでの「爆買い」を行うことがある。これによって、物流業者の荷分け作業に人手が回せなくなったため、陝西省のある大学で、学生たちが「実習」という偽りの名目で物流会社に入って、10 時間で 10 元しかももらえない作業をさせられたことが例(11)では“被实习”を用いて表されている。

⁴ 2009 年に中国教育部が発表した 44 個の漢字の字形を調整するという計画が注目を集めた。教育部の責任者の話によると、9 日間の間に、教育部は手紙、ファックス、メールなどで『通用漢字規範表』についての一般大衆のコメントや意見を 1500 通受け取った。その中で 67% の発言者が漢字調整という計画に賛成し、漢字調整が必要であると述べていたとのことであった。ネットユーザーはこの“67%”という調査結果に疑問を持ち、ほとんどのネットユーザーが信じない或いは受け入れられないという態度を表した。例(13)の“被 67%”という表現はこうした事情を背景として生み出されたものである。

上に挙げた例はすべて他動性の低い述語が用いられている受身表現である。例(7)と(8)の述語動詞“吓”と“感动”は他動性の低い心理動詞であり、これらの動詞は「人間の自発的な精神・生理の状態」(例えば、“他很感动”)と「対象を当該の状態にさせる」(例えば、“我吓他”)という他動的意味を表すものである。このような心理動詞が用いられる受身表現では、他動性の度合いが例(6)の“杀害”ほど強くないため、仕手と受け手の受動関係および動作行為の実施による被害・迷惑の程度や結果もそれほど明確には表されていない。その反面、例(7)と例(8)のようなタイプは受け手が一定の影響を受けたことによって自発的に生じた心理的な変化がより強く表現されるという意味的特徴を有する。また、例(9)および例(10)は目的語をとることができず、自主的な動作行為を表す動詞“哭”と“来”が用いられる受身文である。通常、このような表現では述語動詞が相手に対する影響を表さないため、「影響性」或いは「結果性」を表す文成分や文脈が必要となる。例(9)と(10)のタイプからは、受け手或いは発話者の“哭”や“来”等の他動性の低い動作行為から間接的な影響を受けて迷惑を被るというニュアンスが読み取れる。受け手や発話者の影響による心理的な変化や主観的な感情がその文意から読み取れるという点で、(9)、(10)類の受身表現は(7)、(8)類と共通していると言える。

さらに、例(11)と(12)における“被实习”、“被精神病”等の表現は近年インターネットという特殊な語用的環境で生み出されたものである。“哭”、“来”類や“吓”、“感动”類と比べて、“被X”類には自動詞だけでなく、形容詞(例：幸福、小康)や名詞(例：精神病、网瘾)、数量表現(例：G2、67%)といった品詞が用いられるケースも観察されている。つまり受身表現に用いられる述語の範疇が、他動性の高い他動詞から心理動詞や自動詞のように他動性が低い品詞へと広がり、さらには他動性が具わっていない品詞の領域まで拡張していると言える。意味の面では、“被X”類の受身表現は個別性が強く、それぞれの意味を理解するのにある程度の背景知識が必要であるが、基本的には「不本意な状況で、噂をされたり、不幸や被害を受けたりする」というニュアンスを表す固定的な表現としてすでに定着している。

Sweetser (1990) は言語は人間の認知に体系的に根差していると主張し、発話の解釈には現実世界における社会物理的領域 (sociophysical domain)、すなわち内容領域 (content domain)、認識領域 (epistemic domain)、発話行為領域 (speech-act domain) の3領域のうちどれかが関わりと述べている。内容領域は現実的な動作行為或いは動作行為に関連する事態に関わるものである。これに対し、認識領域は発話者或いは受話者の主観的知覚、認識やすでに把握している情報に関わるものである。また、発話行為領域はある語用的意図を実現するために実施する命令、勧誘、承諾といった言語行為に関わるものである。

潘家焯 (2003) は上記 Sweetser (1990) の説に基づき、これらの3領域を“行域”、“知域”、“言域”と述べて、中国語学の範疇に導入している。同研究では、次のような可能表現“能”の例を用いて、“行、知、言”の3領域の概念を説明している。例えば、

(14) a 小王能说法语。

[王さんはフランス語を話すことができる。]

b 我能骗你吗?

[私が君に嘘をつくもんか。]

c 能把笔记借我一阅?

[ちょっと見たいんだけど、ノートを貸してもらえる?]

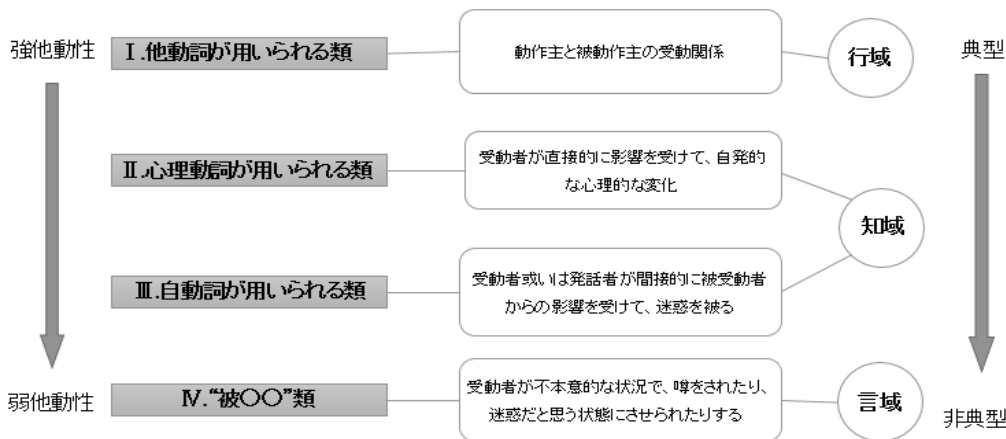
(a~c はいずれも沈家焯 2003:195)

例(14)におけるa、b、cはいずれも助動詞“能”が用いられた形であるが、それぞれの“能”の意味役割と、それがどういった領域に属するかという点においてそれぞれ異なっている。まず、(14a)における“能”は“小王”の能力を指し、“说法語”という現実世界の動作行為に直接に関係を持っているもっとも典型的な可能表現であり、内容領域(“行域”)に属する。これに対し、(14b)の“能”は発話者が“騙”という動作行為を行う能力ではなく、その可能性を表しており、この表現は受話者がすでに把握している知識によって発話者が“騙”という動作行為を行う可能性があるか否かを推論するという前提で用いられている。このため、bの“能”は知識領域(“知域”)に属すると言える。そして、(14c)の“能”は(14a)の能力や(14b)の可能性を表す場合とは異なり、発話者が要望を出すという言語行為となるため、発話行為領域(“言域”)に属すると言える。

以上の分析から分かるように、内容領域に属する意味は本来の語彙的内容に近い実在的な意味である。これに対して知識領域や発話行為領域に属する意味は、本来の語彙的内容から派生した意味となっている。このため、派生のプロセスにおいて発話者の主観的意識が介在している知識領域や発話行為領域の意味は、内容領域に属する意味よりも語彙的基本義が希薄であり、その一方で機能語的役割が濃厚となっている。こうして知識領域や発話行為領域の意味の抽象化が加速していくのである。

助動詞、副詞、構文の意味役割を解明するのに働く3領域の概念を用いて、上述の受身の諸表現に表れている相異性と関連性を明確に説明することができる。以下、受け身表現の4つの類によって構成される連続体およびそれらの位置づけを説明してみる。

【図2】に示しているのは他動性の異なる品詞が用いられる4つの受身文の類型である。それぞれは各自の意味的特徴によって、“行域”、“知域”、“言語”に属し、受身範疇において典型的から非典型的に位置付けられている。



【図2】受け身表現の下位類によって構成される連続体

【図2】から読み取れるように、他動詞、心理動詞、自動詞や形容詞、名詞、数詞等の品詞が用いられる受身表現は、他動性の強弱に従ってI、II、III、IVの四つに分類することができる。意味役割の面においては、“杀害”のような他動詞が用いられるI類は実在的な動作行為によって結ばれている仕手と受け手の受動関係および受け手に起こった物理的な消失や離脱の結果義を明確に表すため、内容領域に属する典型的なモデルとなる。また、“吓”や“感动”のような心理動詞および“哭”や“来”のような自動詞が用いられるIIとIII類は、他動性の度合いがI類より下降しているにもかかわらず、受け手或いは発話者が迷惑を被ったり、ある一定の影響による心理的な動きのように主観的な感情や語用的意図が介在することにより、成立するのである。これらの二種類は内容領域(“行域”)に属するプロトタイプ

プから離れて受動性が弱くなっていく一方で、受け手や発話者にとっての受影性がより明確に表され、認識領域（“知域”）に属する非典型的な成員となる。そして、インターネットに見られるIV類の“被 X”という表現は、受身を構成する重要な要素である受け手と仕手が字面に現われないため、その意味役割は直接に受動関係を表出するというよりは、むしろ言明しがたい受動関係を、局外の傍観者の視座から語るという語用的な役割となる。“被 X”という表現は、沈家煊（2011）において受身表現が発話行為領域（“言域”）に拡張しているところの証左であると見なされ、受身表現の文法化の一環として、重要視しなければならないものである。

全体的に見れば、強い受動性を表すI類はもっとも典型的な特徴を有するプロトタイプとなり、II類、III類となるに従って、受身の成員としての特徴が希薄となっていく。IV類になると受身文としての特徴が極めて希薄になり、もっとも受身らしくない周縁的なモデルとなる。I類からIV類までの表現はそれぞれ実在的受身の機能と受身から逸脱している抽象化の機能を担うものである。I類からIV類までの遷移は中国語の受身の機能が内容領域から意味拡張を遂げ、認識領域や発話行為領域にまで及んでいることを示していると言える。

5. 文法化

文法化とは、動詞や名詞のように語彙的内容を持つ内容語（content words）が、語彙的内容が希薄な助動詞や前置詞・助詞のような機能語（function words）に通時的に変化することを言う（辻 2002：231）。ここで本研究における主な考察対象である受身マーカー“被”の文法化過程をまとめる。太田辰夫（1987）、王力（1980）の述べるところによると、“被”は中国語文法の歴史において、使用範囲がもっとも広く、かつ、もっとも長く用いられている受身のマーカーである。後漢の許慎の作である『説文』によると、生まれた当初の“被”は機能語ではなく、“衣”と“皮”の二つの漢字の組み合わせであり、「掛け布団」という実在の意味を持っていた名詞であった。例（15）はその該当表現である。

(15) a 原文：翡翠珠被。《楚辞·招魂》

b 現代文：翡翠鸟与华丽的寝被。—【名詞】

[（愛玩物としての）翡翠（という鳥）、（寝具としての）華麗な掛け布団。]

この後、「掛け布団」という名詞の意味から例（16）のような「覆う」という動作動詞の意味が派生され、「体に何かをのせると息苦しくなる」という意味から、人間のマイナスの感情が“被”の用いられた表現に読み取れるようになった（例 17）。

(16) a 原文：天被尔禄。《诗经·大雅·既醉》—【動作動詞】

b 現代文：上天降福泽给你。

[天が幸福をあなたの身に覆う。（「天が幸福を授ける」の意味）]

(17) a 原文：秦王复击轲,被八创。《战国策·燕策》—【心理動詞】

b 現代文：秦王反复击砍荆轲, (荆轲)遭受多处创伤。

[荆轲が秦王に何回も斬られて八箇所を傷を受けた。]

また、張俊延（2010）は“被”が受身マーカーとして用いられたのは宋元明清の時代からであり、特に元代にはもっとも重要な受動態の表現とされていると指摘している。

(18) 黛玉知是外祖母了、正欲下拜、早被外祖母抱住、搂入怀中。（清・《红楼梦》第三回）

〔黛玉はおばあさんのことを知っていたから、お辞儀しようとした時に、おばあさんに抱きしめられた。〕

一【前置詞】

例（15）～（18）に示されているように、名詞性形態素を表す“被”の意味は動作動詞、心理動詞までに拡張し、さらに最初の語彙的な実在の意味を失い、文法的機能のみを具える機能語となっている。受身マーカーになるまでに概ね次のような内容語から機能語へと切り替わる過程を経たと言える。

名詞→動詞→前置詞（介詞）→受身標識→……

文法化の一つの結果として、内容語は機能語に変化し、最終的に粘着形態素の形で他の内容語と結び付くこととなる。受身マーカーの“被”は前置詞であると認められる場合があるが、本研究の考察対象としての“被自殺”などに代表される“被 X”という表現の“被”は、文法化における機能語が付属語へと切り替わる段階にあり、典型的な前置詞ではないと主張する。その理由としてはまず、“被”と“X”の間に仕手が現れていないため、名詞・代名詞の前に置かれ、それらを文に導入する前置詞としての機能を“被”が具えていないことが挙げられる。

受身を表す標識である“被”は、通時的変化によって新しい機能が派生されても、それ以前の基本義を表す機能を保持している。例えば前述のように“被”は最初に「掛け布団」という意味を表し、その後に「覆う」という動作動詞や「影響を受ける」という心理動詞の機能をも持つようになるのである。以上のような“被”の変遷および意味拡張によって、受身の範疇では、一つの意味を表すには複数の形式があり、また反対に一つの形式が複数の意味に対応するという一対多の分布状態となっている。このような構文形式の多層化および多義性は受身範疇に複雑性を生み出す要因となる。

6.おわりに

以上、本稿ではプロトタイプ理論を用いて現代中国語の受身表現におけるプロトタイプの統語的、語用的特徴をまとめた。さらに他動性の強弱を指標に、現代中国語受身表現の典型から非典型への意味拡張のシステムおよびシステムの諸成員の間に見られる連続性を見出した。

現代中国語の受身について見ると、非典型的な仕手、受け手、動作行為を用いた場合の容認度が時代の変遷と共に高まっていると言える。受身の表す範疇が構文の本来持つ、客観的に受動関係を表すという機能から乖離し、出来事に対する判断、評価などの発話者の主観性が前景化された表現へと変化していく傾向にある。それと共に、受身の標識“被”の役割が従来の具体的・実在の意味から文法的役割のみを有する機能語へと変化していると言える。

参考文献

- レイコフ・G. 1987. 『認知意味論:言語から見た人間の心』 (池上嘉彦 河上誓作ほか訳、『Women, Fire, and Dangerous Things』の邦訳), 紀伊國屋書店 (1993)。
- 辻幸夫 2002. 『認知言語学キーワード事典』, 研究社。
- 角田太作 1985. 「言語プロトタイプ論」, 『言語』6月号 第14巻 第6号, 大修館書店。
- 黄伯荣・廖序东 2003. 《现代汉语(增订三版)》(下), 高等教育出版社。
- 李珊 1994. 《现代汉语被字句研究》, 北京大学出版社。
- 刘月华・潘文娒・故鞞 1983. 《实用现代汉语语法》, 商务印书馆 (2001)。
- 马真 1997. 《简明实用汉语语法教程》, 北京大学出版社。
- 沈家煊 1994. <“语法化”研究综观>, 《外语教学与研究》第4期。
- 沈家煊 2011. 《汉语六讲》, 商务印书馆。
- 沈家煊 2003. <复句三域“行、知、言”>, 《中国语文》第3期。
- 石毓智 2015. 《汉语语法演化史》, 江西教育出版社。
- 太田辰夫 1987. 《中国语历史文法》(徐昌华, 蒋绍愚译, 『中国語歴史文法』中文版), 商务印书馆。
- 王力 1980. 《汉语史稿》(中), 中华书局。
- 吴福祥 2003. <关于语法化的单向性问题>, 《当代语言学》第5卷, 第4期。
- 徐丹 2004. 《汉语句法引论》(张祖建译), 北京语言大学出版社。
- 张伯江 2001. <“把”字句和“被”字句的对称和不对称>, 《中国语文》第6期。
- 张志公 1953. 《汉语语法常识》, 新知识出版社。
- 张延俊 2010. 《汉语被动式历时研究》, 中国社会科学出版社。
- Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge University Press.